平和・ヒロシマ

惨禍しっかり記憶を

聞きたかったこと

被爆から72年

「原爆の日」を翌日に控えた今年の8月5日。広島市中区のカフェ「ハチドリ舎」の催しで、国内外の人々に被爆証言を続けてきた経験を高校生や20～30代の若者たちに話す男性がいた。同市佐伯区の伊藤正雄さん(76)。10代のころ、病床で出会ったある言葉が、今の活動につながっているという。

■□■

4歳の時、爆心地から約3・5キロの広島市庚午地区（現・広島市西区）で被爆した。自宅前の道路で三輪車をこいで遊んでいると、突然青白い閃光が見えた。「あっ」と思った瞬間、爆風で吹き飛ばされ意識を失っていた。「早くこっちへ」。気がつくと、母喜美枝さん（当時31）の叫び声が聞こえた。玄関口に急いで走り込み、げたを脱ごうと手をかけると、土足で家に上がれば必ず叱る母が「脱がんでええよ」と言った。1坪ほどの土間を見渡すと、玄関の窓ガラスの破片がキラキラと光っていたのを覚えている。母に連れられ、家の地下にあった6畳半ほどの防空壕に逃げ込んだ。

広島市佐伯区 伊藤 正雄さん(76)

父龍雄さん（同41）が経営していた食品会社の工場は、被爆で負傷した人々の避難所になった。しかし一人、また一人と亡くなると、警防団がやってきて、遺体を500メートルほど離れた庚午公園（現・庚午第一公園）に運んで行った。積み上がった遺体は、上から多量の石油がかけられ、焼かれていった。その光景と臭いは70年以上経った今でも、忘れることができないという。

自身にけがはなかったが、原爆は大切な家族を奪った。当時10歳だったという姉律子さんは、爆心地から約500メートルの空鞘町（現・中区）にある母の実家へ遊びに行って被爆。遺骨は見つかっていないという。当時12歳だったという兄輝雄さんは、爆心地から約600メートルの袋町国民学校（現・袋町小学校）で被爆した。かろうじて外形をとどめた鉄筋コンクリート造の校舎から、捜しに来た龍雄さんに助け出された。しかし、全身に負った大やけどに苦しみながら8月29日に亡くなった。

「被爆者の遺体が荼毘（だび）に付される光景は今でも忘れられない」。72年前をそう振り返る伊藤正雄さん＝広島市中区

「敵を愛せ」胸に語り部

■□■

軍に食料品を納めていた父の会社は終戦とともに傾き、両親と妹の4人で夜逃げ。家計を助けるために、入学したばかりの広島観音高校（西区）を4カ月足らずで退学し、住み込みの豆腐屋で働き始めた。半年間、朝から晩まで働いたが、十分な食べ物もなく栄養失調に。とうとう肺結核を患い入院した。「人生とは何なのか」。出家も考えるほど思い悩んでいた時、米国の団体から結核の薬とともに一冊の聖書が送られてきた。ページをめくると「汝の敵を愛せよ」という言葉が目にとまった。意味はよく理解できなかったが、心に残った。退院後に引き取られた親戚の近所に教会があった。言葉の意味を求め、通うようになった。

あの言葉が理解できたのは、半世紀以上経ってからのことだ。金融会社を退職後、高齢化する被爆者の代わりに体験を語る「被爆体験伝承者」の制度に申し込んだ。広島市が主催する3年間の研修中、松原美代子さん(85)の被爆体験を聞くために平和記念資料館や自宅を何度も訪れた。松原さんが「悲惨な体験は私たちだけで十分です。世界中の人たちにはこんな体験をしてほしくない」と繰り返し訴える姿を見て、憎しみや対立からは何も解決しないことを学んだ。「敵を愛する」という言葉の意味もわかった気がした。

姉の律子さんは爆心地から約500メートルにある母の実家で被爆した＝国立広島原爆死没者追悼平和祈念館提供

■□■

「NEVER FORGET」。平和記念公園を訪れた外国人を案内する「ピース・ボランティア」も務める伊藤さんが、繰り返し伝えている言葉だ。「人間は忘れやすい動物。国籍や立場などは違っても、あの惨禍をしっかりと記憶しないといけません」

（高橋健人）